

松本清張記念館

◆館報◆

2011.12
第38号

ゴーガンには絵があった。

しかし、小塚氏には絵がない。
絵は彼の愛する女性だった。

『駅路』昭和36年11月
文藝春秋新社

Paul Gauguin『Arearea』1892年12月

「駅路」は昭和三十五年八月七日
「サンデー毎日」に掲載された。

現在入手できる本

- 『傑作短編集6駅路』新潮文庫
- 『松本清張短編全集10空白の意匠』光文社カッパノベルス
- 『松本清張小説セレクション34』中央公論
- 『松本清張全集』第37巻 文藝春秋
- 『駅路／最後の自画像』松本清張・向田邦子 新潮社

目次

- 開館13周年記念
篠田正浩氏講演会……………2
- 特別企画展
「いつもカメラを携えて」……………5
- 展示品紹介……………6
- 点描 作品の舞台を訪ねて……………6
- 友の会活動報告……………7
- トピックス……………8

作品紹介

小塚貞一は、銀行を定年退職した後、一人で旅行に出たまま行方不明となった。カメラと旅行が趣味で、女性関係の噂もない初老の男

が、なぜ居なくなったのか。捜査にあたる呼野刑事は、小塚が旅先で撮った写真が、全て東京以西、広島以东であることから、広島支店時代に鍵があると確信した。

果たして、広島に手がかりを見つけ、新しい生活を始めたに違いないと、場所をつき止めた呼野だったが…

小塚の自宅にあったゴーギャンの画が、彼の第二の人生を暗示していた。

「平凡な永い人生を歩き、或る駅路に到着したとき、今まで耐え忍んだ人生を、こころで解放してもらいたい、気儘な旅に出直したいということにならないかね。」

勤め人を全うした男が、最後に樂園を求め的心境に、呼野は共感を寄せる。

(専門学芸員 柳原 暁子)

篠田正浩氏 講演

●平成二十三年八月四日(木)
●北九州市立男女共同参画センター1階
●参加者三〇〇名

私の松本清張体験

戦後体験と歴史への関心

私は一九三一年生まれで八十歳になりました。一九三一年とは日本が満洲事変を起こした年ですね。今日は、松本清張という作家と私がどういう関わりを持って、どんな体験をしたかをお話しします。



日本が戦争に負けたとき、私は中学三年生でした。それまでは天皇陛下が神様で、絶対アメリカの捕虜になってはいけなと、講堂で切腹の仕方を教わりました。軍事教官に「刀を突き刺してばつとひいたら腸が飛び出す。皮だけ切れ。死ぬのは頸動脈だ」と、そこまで教えられたんです。天皇陛下のため、国のために命を捧げるといふのは我々の少年時代はごく当たり前だった訳です。

玉音放送は「忍び難きを忍び」のひとことで負けたんだなと分かりました。でもその後、衝撃がもう一度やって参りました。翌年の元旦、昭和天皇がされた人間宣言です。天皇が宣言ということはありませんから、自ら「朕」と名乗って出された最後の詔勅ではないでしょうか。明治天皇が近代日本の政治のスローガンとされた五箇条の御誓文をリピートなさったのち、こう言われたのです。

「朕と爾ら国民との間の紐帯は、終始相互の信頼と敬愛とに依りて結ばれ、単なる神話と伝説とに依りて生ぜざるものにあらず。天皇をもって現御神とし、かつ日本国民をもって他の民族に優越せる民族にして、ひいて世界を支配すべき運命を有すとの架空なる觀念に基づくものにも非ず」と。「私は単なる神話と伝説によって生ずるものではない」。現人神ではないと。私はこの人間宣言によって、今まで教えられた歴史が全くインチキだと分か

りました。だからといって正しい日本の歴史を教えてくれる人はおらず、自分で学ぶしかないというのが私の戦後の出発でした。

その後、邪馬台国の卑弥呼の存在を知りました。それまでは天皇家のご先祖は伊勢神宮に祀られている天照大神という女神と教わっていましたが、「日本書紀」には宇佐八幡宮に祀られている神功皇后が卑弥呼ではないかと書いてあります。日本人が「古事記」「日本書紀」で自分の歴史を書けるようになったのは八世紀で、それ以前は中国朝鮮の歴史を探るしか方法がありません。私は日本という国の始まりをこの邪馬台国の卑弥呼に求めようとしたんですね。

清張の大きな視野

あるときから、松本清張さんが積極的に書かれた古代史の論文を、「古代探求」「古代史疑」を初めとして全部を隅から隅まで舐めるように読み尽くしました。推理小説で成果をあげられたのみならず、日本の近代史に大胆なメスを入れ、一切のタブーや権威をばね除けて、一市井の人として日本の歴史、政治史に果敢な挑戦を始められていました。その現代から一転して古代に入られた。私は彼の邪馬台国研究を読みました時に、「この人も昭和天皇の人間宣言に触発されたんじゃないか」という共感を勝手に持ちました。松本清張は北九州小倉で生まれ育つ

て、目の当たりに対馬海峡を見ている訳ですから、邪馬台国研究についての論調はとても説得力があります。

人間の営みや歳月を従来の歴史学はほとんど語っていません。私が十四歳の時切腹の仕方を教わったことは歴史の教科書には載りませんが、皇国少年が数百万人はいたように、私個人だけの問題ではありません。第二次世界大戦は、日本という国の宗教戦争だったと思うんです。天皇陛下を神様と仰がなければ、三百万人も死にません。ジハードというイスラム原理主義の信仰と全く同じ気持ちで、あの時代の日本にとりつき、我々はとてつもない過激な宗教的熱気に感染していたといえると思うのです。

土俗的な日本の共同体信仰、そこに囲い込まれている一種のムラ現象、そして古代から繋がっている日本人の習性や共同体が持っている幻想、その共同体の外からは差別されるといふ力学が、松本清張さんの推理小説には至る所に書かれています。単なる歴史や推理が好きな作家という範疇を越えて、文化人類学あるいは民俗学という大きな視野を持っていたのだと思います。私は自分が体験した昭和、それまでは人間ではなかった天皇が人間宣言をしたという本当の歴史を、我々一人一人が責任を持って後世に伝えるべきだと思っています。世界にちゃんと通用する日本の歴史として誰がどう伝え書くのかという問題が、いま日本

に突き付けられているのではないでしょうか。

とくに松本清張さんの古代史論で共鳴したのは、邪馬台国九州説です。彼はどんな学者より「魏志倭人伝」を、日本だけではなく朝鮮や満洲東北部沿海州の記述まで綿密に読み込んだ。中国と往来し政治的な交渉がなされたことが書かれています。その外交プロセスの迅速さを記述した倭人伝から、女王国は、九州という基盤を除いては考えられません。京都奈良から北九州まで飛行機ではあつという間ですが、上から見ただけでも大変な海山川がある。歩いてきた当時のことをきちんと現場を踏んで松本清張は掴んでいると思っただけですね。

私の出発点と最後の映画 「スパイ・ゾルゲ」

私は六十を過ぎてから「映画監督として俺は日本のことを描いたことがあるのか」と問い続けました。早稲田大学文学部演劇科に入学した最大の理由は、日本の能・歌舞伎の勉強をしたかったからです。

なぜかといいますと、私は戦争に負けモラトリアムの傷痕に陥り、勉強も何もする気がありませんでした。街には民主主義があり、グリーン・ミラー楽団の「イン・ザ・ムード」も聞こえてきました。減ってしまった日本が哀れで悲しかったのです。そんな時、母に連れられて近松門左衛門の「心中天

網島」を観まして、涙を流しました。この世で添い遂げられず飛び出すようにして出てきた二人が、道行の場面では紋付き羽織、お葬式に行く礼装（あるいは婚禮の姿か）を着ているんですね。敗戦当時アメリカ占領軍は、日本人に仇討ちとか武士道とか愛国主義をもう一度目覚めさせてはいけなないと、恋愛劇しか上演させなかった。必然的に私は「曽根崎心中」など義理と人情の板挟みになる物語をずっと観るようになりました。その道行を見ながら「ああ、私は少年時代、天皇陛下と日本という国と道行をしようとしていたんじゃないか」と思いました。

日本の能・歌舞伎を勉強すると、すべて死者の芸能です。道成寺の安珍清姫の物語も、「仮名手本忠臣蔵」、「義経千本桜」、「昔原伝授手習鑑」も。政治的・恋愛的に敗北し非業の最期を遂げた人々を日本の民衆はお祀りし、芸能になったんですね。これを追究することで、少年時代の自分のマインド、スピリットの源を知ることができるのではないかと、それが私の映像作家としての出発点でした。

もう一つの松本清張さんの影響は昭和史です。映画監督として日本中至る所を旅行しましたが、戦前のビルが無傷で並んでいる門司を見て「昭和を一目で見られる、三時間の映画を作ろう」と、昭和十年のゾルゲ事件をやりたいとき思いました。

最後の映画「スパイ・ゾルゲ」は、「日本の黒い霧」あるいは「昭和史発掘」という松本清張の近代史論に大変触発されています。とくに膨大な資料が読み込まれている二・二六事件には軍国主義に突入する前夜の日本の姿があり、天皇を中心とした日本と、近代化に向かう理知的な日本とが交差している時代の凄まじさが内包されています。

日本が起こした一九三一年の満洲事変は、アメリカを目覚めさせ世界性を持たせてしまった事件で、現在に至るまで影響を及ぼしています。私が研究したゾルゲ事件も、この満洲事変の影響が大きいのです。

関東軍が満洲に攻め込んだとき、一番敏感に反応したのは国境を接するソビエトでした。日本が満洲鉄道を押さえシベリア鉄道と繋いだら、いつモスクワまで日本軍の精鋭が押し寄せてきてもおかしくない。ソビエトが日本軍の意向を探るために送った軍事探偵が、リヒャルト・ゾルゲです。一九三三年に彼がやってきたのは、日本人は中国の関係がそんな状態とも意に介せず東京音頭を踊りまくっているという日本でした。

ゾルゲの背後から昭和史を描く

満洲事変をアメリカはどう考えたか。アジアの難民をサポートしノーベル平和賞も受賞したニコラス・パトリ博士は、日本軍が満洲で野心的に覇権を確立しようとしたので、日本製

品のボイコットを提言しました。すぐにロックフェラー財団、モルガン財団そして在米華僑が一斉に協力します。日本の外貨獲得の四十二%を賄っていた良質な絹は、日本の農家の主婦達の勤勉さと面倒見の良さで高品質を保ち、世界のマーケットを独占していました。その七十%を輸入していたアメリカがボイコットしたのです。この経済制裁は劇的な効果を上げ、昭和八年の東北大飢饉ともあいまって、農村の疲弊は凄まじく、餓死者が出るほどの困苦欠乏に陥りました。役場には「娘売買について面倒みます」という張り紙が張られるほど悲惨な光景が起きました。

今は華やかな六本木ですが、その昔は麻布第三連隊がありました。将校達は農村の地主の次男三男です。彼らが





号令をかける農民出身の兵士達の姉妹は、吉原や中村の遊郭に売られているんですね。将校達に、こんな日本にしてしまった官僚、天皇の側近、軍閥、財閥を叩き潰そうという熱が起き始めます。

ゾルゲは朝日新聞記者だった尾崎秀実と上海で知り合いました。尾崎は黨員ではありませんが、アジアの貧困を救うのは共産主義しかないという信念を持っていました。ソビエト共産党の支配を受けていた中国共産党に対し、周恩来や毛沢東が中国民族独自の共産党を作ろうとしていた時期で、また、蒋介石の国民党があり、三者が入り乱れ中国の未来がまだ見えないときです。ゾルゲと尾崎は、共産主義という党派に属す以前に国際的な視野を持ったジャーナリストでした。

ゾルゲは昭和十年八月「日本の軍部」という論文を発表します。データの半分は尾崎秀実が担っていると思いますが、正確に日本の政治分析を行い、青年将校らが革命を起ころうとしていることをびしっと見えています。

司馬遼太郎さんは「坂の上の雲」のあとがきで、日露戦争に関する日本の

参謀本部の膨大な記録は我が師団長の功績ばかりで、具体的な戦記はなかったと書かれています。お会いした時も、「夜郎自大になっている日本の軍部の悲惨さが日本国民の悲劇を招き寄せた」と、「軍国主義に傾斜する前年、昭和十年頃の日本についての唯一の資料はゾルゲと尾崎のレポートしかないね」としみじみおっしゃっていました。彼らは他民族間を生きてきたから日本を見る目もフェアで、この感覚が昭和の日本にはなかったんですね。

二二六事件をめぐるゾルゲと尾崎を浮かび上がらせて、その背後にキメラを据えて私なりの昭和史を描きたいと思いました。

もうひとつ、外貨を稼いだ生糸という輸出品を失ったとき日本がどうなったかを昭和は示しています。資本主義が人間を救うことはあり得ない、我々は覚醒しなきゃならない時代にかけていると思います。

情報と言論の自由の重要性

昭和の日本はもう一つ大きな過ちを犯しました。今のベトナムを占領したんですね。フランスがヒトラーに敗れ、ヴィシー政府という傀儡政権ができたものですから、ドゴール將軍達はロンドンに亡命してフランス政府をつくった。その間ベトナムは、仏領インドシナと言いましたが、空白だったので日本がそこに入りました。ゾルゲと尾崎は情報を分析して、日本は

石油を求めて南方に進出するだろう、シベリアには行かないとモスクワに打電しました。シベリアの戦車部隊はシベリア鉄道でモスクワに戻り、モスクワ郊外までできていたナチスドイツ軍を撃破します。ゾルゲの電報はソビエトだけではなく連合国軍も救う大スクープになります。これが十二月五日です。凍てついたモスクワの広場をドイツ軍の捕虜が歩かされている三日後に、日本は真珠湾を攻撃するんです。こんなに情報のとろい国がよくあんな戦争をやったもんだと思います。

ベトナムへの侵攻ののち、アメリカは日本に次の経済制裁、石油の禁輸を行います。大東亜戦争、第二次大戦、あるいは太平洋戦争は、絹と油の戦争だったといえると思うんです。日本はまず絹で敗れて、次に油で敗れた。我々はいかに情報から遠ざけられていたか。権力も情報から遠ざけられ、注意を払うことができなかつた。

言論が統制、弾圧され、表現の自由を奪われた日本の軍国主義時代の戦前・戦中の悲惨さを松本清張さんは身をもって自覚していて、だから営々と「日本の黒い霧」を書こうとしたのではないのでしょうか。

いまの日本は僕はとてもいいと思います。どんなに総理の悪口を言っても、誰も逮捕される気遣いはないですよ。ただこの震災のことで言いますと、四ヶ月しか経っていないのに「四ヶ月も経っているのに何もして

いないではないか」というジャーナリズムが許せません。地震の上に津波が来、原発事故もある。こんな三重苦を体験した政府は初めてです。阪神大震災だって結構苦労したのに、青森から千葉まで七百公里の規模です。リモコンを押せば画面が変わるように、それが四ヶ月で元に戻せると考える日本人はもう自然に対する感覚がないのでしよう。百箇日法会が済まないというブルドーザーを入れたくないという土俗信仰に気づかない。私たちは情報化して、分析して人間の本性に迫り、記事やニュースを読む必要があります。ということと、私の話を終わります。どうもありがとうございました。

篠田 正浩 (しのだ まさひろ)

1931(昭和6)年、岐阜県に生まれる。早稲田大学文学部を卒業後、松竹撮影所に入社。60年、『恋の片道切符』で監督となる。大島渚、吉田喜重らとともに「松竹ヌーベルバーグ」として前衛的名作を発表。66年、松竹を退社しフリーとなり、67年、独立プロ「表現社」を設立。03年、『スパイ・ゾルゲ』を最後に監督業引退。10年、『河原者ノススメ 死穢と修羅の記憶』で泉鏡花文学賞を受賞。主な作品に、『心中天網島』『卑弥呼』『瀬戸内少年野球団』『鍵の権三』『舞姫』『梟の城』など。



携えたいカメラ

特別企画展

展

松本清張が愛したカメラとその時代

松本清張没後20年記念

特別企画展ご案内

清張の写真歴はかなり古く、昭和12、3年頃に遡ります。当時、製造・発売され始めたばかりの国産カメラを愛用していました。

本展では、青年時代からいつもカメラを携え各地を歩いた清張の、カメラや写真とのかかわりを、その変遷とともにご紹介します。

■開催期間 2012年1月20日(金)~3月31日(土)
■場所 松本清張記念館地階 企画展示室

I 清張が愛したカメラ

戦前から最晩年まで、様々なカメラを使用していた清張。中には歴史に残る「名機」もあれば、普及版コンパクトカメラまでと、幅広くカメラを愛用していたことがわかります。



戦前の国産カメラ
セミファースト

日本カメラ博物館蔵



ニコンF3清張スペシャル
ニコンに依頼して改造したカメラ
松本清張旧蔵

III カメラの変遷と時代背景

清張のカメラ遍歴は、日本のカメラの変遷を色濃く反映しているといえるでしょう。

デザインや報道といった、清張の仕事と密接した世界で、カメラや写真技術・技法も発展していきました。



展覧会出品ポスター
カメラ店の広告 松本清張作



カメラを使った
国策ポスター 松本清張作

II 清張カメラアイ

版下の図案を作る仕事柄か、スナップショットの中には凝ったアングルの写真があります。

清張が撮った写真からは、活字で記されなかった空間を垣間見ることができます。



家族アルバムから

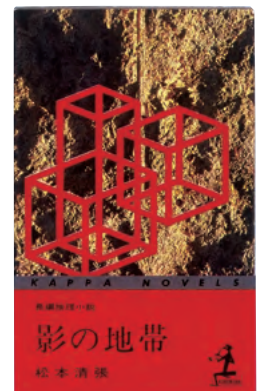
松本清張撮影

IV 清張作品のなかのカメラ

作家となってからは、取材の記録としてもカメラや写真が活用されました。また、作品にカメラを使ったトリックや謎解きを取り入れたり、登場人物にカメラマンを設定したのもも。



「十万分の一の偶然」
1980年「週刊文春」



『影の地帯』
1961年 光文社・カッパノベルス

読書用ルーペ



清張には、レンズ愛とも言うべきものがあつたようだ。カメラ好きであつたことは、折に触れ紹介されているので、ご存知の方も多いだろう。熱心な読者の中には、清張作品にしばしばカメラマンが登場したり、アリバイ作りや事件解決の鍵としてカメラや写真が用いられることに、お気付きの方もいるに違いない。そのような系譜に「湖底の光芒」という作品がある。諏訪のあるレンズ工場を舞台にしたミス터리だ。レンズを愛でる人たち、高度な技術を持つ研磨職人が登場する。さて、清張の書齋の品として展示しているルーペだが、よく見ると「Nikon」の文字が見える。早速ニコソに問い合わせしてみると、商品名「読書用ルーペ8D」であることがわかつた。発売時のカタログによると「レンズからグリップまですべてプラスチック製なので軽く、長時間の読書などにも好適。レンズ表面には傷がつきにくいように、表面硬化コーティングを施しました」という説明が添えられている。値段は五千円。販売時期はおそらく一九八二年八月〜一九八九年七月であるという。光学メーカーが製造しただけに、像のゆがみが少なく、不自然な色付きもない。実は、清張の所蔵品のなかには、ニコソ製の本格的な双眼鏡もある。これは、ニコソ製レンズへの信頼ではないか。

そもそも「株式会社ニコソ」とは、大正六年に設立された「日本光学工業株式会社」が創始。第一次世界大戦時に光学機器の国産化が急務となり、軍部からの要請を受けた三菱の岩崎小彌太（創業者彌太郎の甥）の尽力によって発足した会社だ。軍需により拡大し、昭和十六〜十七年には、戦艦「大和」「武蔵」に装着された測距儀を完成させ、その精度の高さは有名。明治四十二年生まれの清張にとつては同時代といえる。やがてそれらの技術はカメラの世界で革命を起こす。昭和二十五年、ニコソ製レンズの「ニコソール」で撮影した写真が次々と「ライフ」誌を飾り、評判になったのだ。当時、清張は朝日新聞西部本社広告部意匠係主任、「週刊朝日」の懸賞に「西郷札」が入選した。「アサヒカメラ」は、戦前からある歴史の古いカメラ雑誌だ。清張は、戦前からのカメラ愛好者であり、朝日新聞に勤務していたから、この雑誌を読まなかつたはずはないだろう。「アサヒカメラ」には講座的な記事が必ずあり、光学的な解説も掲載された。昭和十四年十二月号に「中等写真術 第二講 写真レンズの理論」と実際 山田幸五郎が、昭和二十五年四月号には「写真レンズの出来るまで 日本光学にて 撮影—影山光洋 記事—倉辻實俊」が見られ、前後にもレンズを取り上げた記事は度々登場する。このあたりも、清張の知識となつていったのではないだろうか。

※参考文献 「光とレンズの物語」ニコソ75年史

（専門学芸員 柳原暁子）



点描 作品の舞台を訪ねて

「天城越え」①

今号から新しい企画の点描を連載します。清張作品の舞台となつた場所を訪れ、事件の検証を試みます。第1回は「天城越え」です。

「私が、はじめて天城を越えたのは三十九年昔になる」というのは松本清張の名作「天城越え」の冒頭である。この作品では、大正十五（一九二六）年六月二十八日のことと、「私」は当時十六歳とされている。

同作品中の静岡県警察本部「刑事捜査参考資料」の「天城山の土工殺し事件」によると「大正十五年六月二十九日午前十時、湯ヶ島巡査駐在所より、次の報告があつた。天城トンネルの下にあたる本谷入り製氷所付近本谷川にかかつている白橋の側で何か異変があつたのではないかと届出があつたという。

本谷川は、湯ヶ島で猫越川と合流し、狩野川となる。白橋は旧天城トンネル北口から一キロメートル下つたところにかけるられた橋である。その橋のそばに製氷所があり、冬期の酷寒を利用して天然水を製造し、「氷室」という一種の水倉に夏の需要期まで貯蔵していた。

白橋から三十メートルほどの所にある氷倉に二十四センチメートルのはだしの足跡があつたことから、銘仙の派手な縞柄を着て、裸足のまま草履を帯に挟んだ、

二十四・五の女が土工殺しの犯人と断定され、逮捕された。この氷室にあつたはだしの足跡が決め手とされたのである。次回は、氷室について記す。

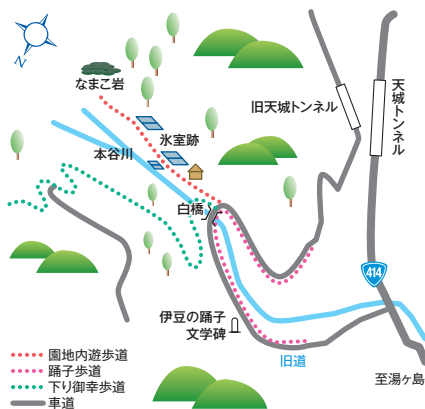
（西本 衛）



白橋



製氷所跡



■ NHK松本清張原作ドラマ番組の寄贈及び上映会

7月7日、NHKが昭和50年代に土曜ドラマシリーズとして制作・放送された、松本清張原作のドラマ14作品が、NHK北九州放送局開局80周年を記念して、同局より記念館に寄贈されました。記念館では、これらの作品の上映会を今後も適宜開催していく予定です。



清張原作ドラマを寄贈する関口局長(左)



■ 上映会

9月から12月まで毎月3作品ずつ上映会を開催しました。

初日の9月17日にはNHK北九州放送局の関口博之局長も来賓としてご出席されました。9月は「火の記憶」「愛の断層」「最後の自画像」、10月は「事故」「棲息分布」「天城越え」、11月は「たずね人」「虚飾の花園」「一年半待て」、12月は「中央流沙」「遠い接近」「依頼人」を、それぞれ9日間ずつ記念館企画展示室映像ホールで上映しました。いずれも清張自身が特別出演し話題となった作品です。

毎月500名を超える清張ファンが来場し、当時を懐かしむとともに、「最後まで続く緊張感はさすが清張作品」「現代でも色褪せない作品」などの感想が多く寄せられました。

■ 入館110万人達成

9月19日、記念館の入館者数が110万人に達しました。

110万人目の入館者は東京都小平市の桐生隆さんで、北九州市に帰省中のところ、ご夫妻で来館されたとのことでした。

藤井館長から、入館110万人目の認定証と記念品が贈られました。



友の会 活動報告

● 平成23年度 年次総会・懇親会

8月4日(木) 参加者44名
北九州市立男女共同参画センター ムーブ 5階

篠田正浩監督の記念講演の後、平成23年度年次総会が開催されました。前年度の事業報告・決算、新年度の事業計画・予算等の審議が行われ、拍手をもって承認されました。会員の方から活発なご意見・ご提案もいただき有意義な年次総会となりました。

総会終了後の懇親会は、会場を松本清張記念館地階ホールに移して、約50名が参加し盛大に行われました。篠田監督にも特別参加をいただき、藤井館長の挨拶をはじめ、遠方からの参加者のスピーチなども行われ、和やかな懇親会となりました。



● 文学散歩「国東半島・安心院」

11月8日(火) 参加者42名
見学先 真木大堂→[国宝]富貴寺→[安心院]清張文学碑→妻垣神社
今回は、邪馬台国ブームを引き起こした「陸行水行」の舞台を訪れました。各訪問先では普段聞くことのできない詳しい説明があり、また、昼食の「だんご汁」も大好評で、参加者から「大満足、参加して本当に良かった」との声がたくさん頂きました。

● 清張サロン

平成23年度、第1回・第2回の清張サロンは9月から開催している「NHKドラマ上映会」作品を取り上げ、ドラマを通して原作をより深く探求していこうという企画で開催しました。

講師からの説明後、講師や参加者同士による意見交換などで大変盛り上がり、充実したサロンとなりました。(いずれも、記念館地階会議室)

第1回 9月29日(木) 14:00~16:00 参加者25名
●テーマ「火の記憶」 ●講師 小林慎也氏(梅光学院大学客員教授)
第2回 10月21日(金) 14:00~16:00 参加者15名
●テーマ「駅路」 ●講師 柳原暁子氏(松本清張記念館 専門学芸員)

● 友の会会員 更新のお知らせと新規会員募集 ●

松本清張記念館友の会は8月1日~翌年7月31日までを1年度として、文学散歩や清張サロン、講演会、生誕祭、友の会だよりの発行、記念館に関する情報提供など多彩な事業を展開しています。

年会費は3,000円です。皆様のご入会を心よりお待ちしております。

友の会入会のお申し込みは… TEL. 093-582-2761 松本清張記念館友の会事務局まで

第14回

松本清張研究奨励事業募集

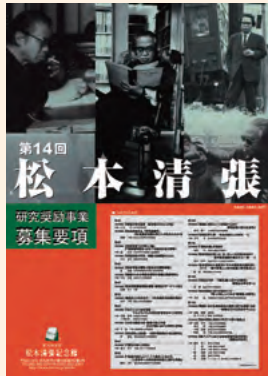
募集要項

- 対象 ①松本清張の作品や人物を研究する活動
②松本清張の精神を継承する創造的かつ斬新な活動(調査、研究等)

※上記①②の活動で、これから行おうとするもの。ジャンル、年齢・性別・国籍は問いません。ただし、未発表に限りです。個人または団体も可。

内容 入選者(団体)に200万円を上限とする研究奨励金を支給します。

応募方法 今後取り組みたい調査・研究テーマ等の内容が具体的にわかる企画書、予算書、参考資料(様式は自由、ただし日本語)を、平成24年3月31日までに応募してください。



※詳しくは、ホームページをご覧ください。記念館までお問い合わせください。

第13回

松本清張研究奨励事業
奨励金贈呈式

平成23年8月4日、第13回松本清張研究奨励事業奨励金の贈呈式が行われました。入選者は次のとおりです。

研究に国際的広がり

企画名 韓国における清張作品の受容に関する調査・分析

入選者 国際共同研究 森脇 錦穂(代表・翻訳家)ほか1名

企画名 松本清張と昭和30年代『中間小説誌』

入選者 共同研究 高橋 孝次(代表・千葉大学非常勤講師)ほか3名

企画名 東アジアにおける松本清張作品の受容

入選者 国際共同研究 藤井 省三(代表・東京大学教授)ほか6名

イベント

「清張さんクイズウォーク」

■7月27日(水) ■記念館常設展示室

博物館実習中の大学生が「小学生が清張さんに親しみきっかけを」との想いからイベントを実施しました。常設展示室内のみどころを網羅したクイズを解いていくうちに、清張に詳しくなれるという企画です。

当日は16人の小学生が、家族や友達と参加。大学生のナビゲートのもと、それぞれ楽しい時間を過ごしました。



「清張さんのメガネのレンズはどちらが厚いかな?」



イラスト:山藤 章二

編集・発行

松本清張記念館

〒803-0813
北九州市小倉北区城内2番3号
TEL 093 (582) 2761
FAX 093 (562) 2303
http://www.kid.ne.jp/seicho
制作 (株)エディックス

- 開館時間 午前9:30~午後6:00(入館は午後5:30まで)
- 休館日 年末(12月29日~12月31日)
- 観覧料 一般/500円(400円) 中・高生/300円(240円)
小学生/200円(160円) ()は30人以上の団体
- アクセス JR: 小倉駅から徒歩15分 西小倉駅から徒歩5分
小倉駅からは100円バスをご利用いただく便利です(小倉城・松本清張記念館前下車)
車: 北九州市高速、大手町ランプより5分

東アジアにおける松本清張作品の受容(国際共同研究)
公開シンポジウムを開催します

中国・香港・台湾・韓国そして日本の文学・映画研究者が結集し、東アジア各地における松本清張作品の受容について多角的に調査・研究した成果を報告します。

●代表 東京大学教授 藤井 省三(中国近代文学)

■平成24年2月11日(祝) [第1部]10:00~12:00 [第2部]13:30~15:30

■松本清張記念館 地階オープンスペース

※2月3日(金)までに電話・ファックスでお申し込みください。

●編集後記●

今号から新企画の点描「作品の舞台を訪ねて」が始まりました。皆さんもカメラを携えて清張作品の舞台を訪ねてはいかがでしょうか。

さて、2012年は、清張没後20年です。これを記念した事業の第1弾として1月20日から特別企画展「いつもカメラを携えて」を開催します。清張愛用のカメラや清張自身が撮った写真などを展示します。ぜひ記念館にお越しください。(西本 衛)

